

在ソ朝鮮人歴史学者

金ケルマン氏を迎えて

飛田 雄一



最近、むくげ通信の紙面争奪には、かなりのものがある。旅行記を書くのが好きな私は、何回かそれを書いた。時には遺憾ということにもなるのが、発行後の合評会ではなかなかいい点がもらえず、今夏の旅行記は没になってしまった。八月中旬のソウルで開かれた「日本の天皇制と神社参拝問題」のセミナーの後、憧れの智異山にパルチザン闘争の跡を訪ね、最高峰の天王峰（1915m）まで登つたが、

残念ながらそういう経緯で書かせてもらえない。「飛田さんの智異山行が読みたい」という方は、どうか、編集部に圧力をかけていただきたい。

さて、この記事は、去る八月三一日から六日間、神戸に滞在し、われわれと交流した在ソ朝鮮人・金ケルマン氏（38歳）のことを記録に留めるためのものである。氏は、ソ連のカザフ共和国アル

マータに住む在ソ朝鮮人三世の歴史学者で、スターリン時代の沿海州から中央アジアへの朝鮮人の強制移住に関して、初めて本格的な研究論文を書いた研究者だ。日本語の雑誌『今日のソ連邦』（89年6月号）には「ソ連に住む朝鮮人」という論文もかいている。今回の来日は、むくげの会とも友好関係にある東京の現代語学塾の「レーニンキチを読む会」が日本に招待したので実現した。

「読む会」では今年の七月、ソ連で発行されている朝鮮語新聞『レーニンキチ』（最近「高麗日報」と改称された）から在ソ朝鮮人関係の記事を翻訳して「在ソ朝鮮人のペレストロイカ」（飢風社刊）を出版した。金ケルマン氏もその中で、「朝鮮人移住民——初版の歴史から」「民族教育の歴史」を書いている。この本の出版後、著者のひとりの金ケルマン氏がソウルに留学中であるとの情報を得た「読む会」は、印税を用いて東京に招待したのである。われわれは、その金ケルマン氏を東京から神戸に招待したのである。在ソ朝鮮人の民族運動のリーダーでもある金ケルマン氏は、在日朝鮮人との交流等をハードスケジューの中であつたが勢力的に行つた。

来神された八月三一日、ちょうど神戸学生青年センターで「第二回朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える全国交流集会」の反省会および打ち上げがあり、さつそくそれに合流した。ロシア語を母語とする金ケルマン氏は、一年前には全く朝鮮語を話せなかつたという。ソウルでの六ヶ月間の勉強で話せるようになつたという朝鮮語でわれわれは話をした。ドイツ語を大学で教えていたという彼は、英語もOKで、いろんな言葉が飛び交っていた。金ケルマン氏を含めて「金海金」が三人もいたりして（金諒美氏、金英達氏）、そんな話もはずんでいた。

翌日曜日は、大阪生野にある在日大韓基督教教会大阪教会の礼拝に出席し、昼食会にも参加した。その後、暑い中を朝鮮市場、ミレ編集部、生野民族文化祭の練習を訪ね、取材をしたりされたりという具合だった。夕方、鶴橋の喫茶店で休んでいたら文化祭の練習に参加していた高校生グループと再会し、またワイワイと話に花が咲いた。夜は夜で姜在彦先生と焼肉屋で一席もうけた。朝日新聞書評欄の「在ソ朝鮮人の…」を読まれた方もおられると思うが、書評委員の姜在彦先生が書いてくださったものだ。

月曜日は、日本に来てやっと観光として奈良へ行つた。私も、おかげで小学校の遠足以来の奈良観光だった。若草山で韓国からの一団に会つたが、彼らは、ソ連から朝鮮人が来ていることを信じなかつたり（バスポートを見てから納得した）、朝鮮語を喋るわれわれを日本人と信じなかつたりと、なかなかおもしろかつた。夜、なにか食べたいかと聞くと、なつてたつてロシヤ料理だと言う。ソ連を出てから六ヶ月、ソウルでも東京でも食べる機会がなかつたので、是非食べたいという。三宮にあるバラライカというロシヤ料理店にいつた。ボルシチにピロシキを食べ、おいしい、おいしいという。店長さんにインタビューをしたいといふので来てもらい、店の由来等を聞くと、ハルビンにいた祖父がそこでロシヤ人から料理を習い、戦後、神戸で店を開いたという。

火曜日には、兵庫名物の朝鮮図書館、青丘文庫と錦織文庫を訪問し、夜には学生センターで講演会だ。むくげの会のゲストで、朝鮮史セミナーをあわせた講演会を開いた。講演は朝鮮語ではなくてロシヤ語でしたいという。日常会話は朝鮮語でもいいが、歴史的な話はロシヤ語でないとやりにくいという。日本人が朝

鮮語を勉強すれば、漢字語を共有できるので、案外複雑な話も容易であるという面もあるが、金ケルマン氏は朝鮮人でもロシヤ語人なので、歴史の話を朝鮮語でするのはたいへんなのだろうと思つた。急遽、堀内稔さんの同級生でソ連関係の商社で働いている森下さんにお願いした。（堀内さんも森下さんも神戸外大ロシヤ語学科の卒業である）主に、一九三〇年代の朝鮮人の強制移住の話を中心に講演をしてもらつた。一九三七年、一八万人の朝鮮人が、予告後一、二日のうちに食料と身の回りのものだけを持つてシベリヤ鉄道に乗せられ、五千キロを移住させられたというから驚くべきことである。水曜日は、水野直樹さんの案内により京都のウトロを訪ねた。そこで在日朝鮮人とその交流は特に印象深かつたようで、その後何度もそのことが話題となつた。右の頁の写真はその時の模様である。

私は、木曜日にゲルマン氏を東京に見送つたが、終末の東京での会議を利用して再び、現代語学塾主催で九月六日に開かれた講演会にも参加した。演題はズバリ「在ソ朝鮮人のペレストロイカ——在ソ朝鮮人は今」。やはりロシヤ語で講演した。学生時代から在ソ朝鮮人の歴史に興味を持っていたが、研究できるようになつたのはまさにペレストロイカのおかげだという。朝鮮語を解する朝鮮人は多くなく、約八割は完全にロシヤ語で生活しているというが、ペレストロイカがなければソ連における朝鮮語の死滅はもつと早かつたのではないかとも言う。

遠い存在であつた中央アジアの朝鮮人が、金ケルマン氏の来神により、急に身近なものとなつた。わたしのこころは、もう、カザフ共和国のアルマータに向いている。近い将来、そこを訪ね、我が「通信」にも旅行記を是非書かせてもらいたいと思つてゐる。